

新設欄の紹介

<反省させられた症例>

最善をつくしたが、後になって考えてみるとこうした方がよったのではないかと反省させられた症例、訓練・指導をしている最中にまずい点に気づき、別な方法を試みたら結果的にうまくいった症例、など反省させられた症例を紹介していただく欄です。

<リハビリテーション・インフォメーション>

日本の北から南から、各都道府県のリハビリテーションの現況、また理学療法士・作業療法士諸氏の活躍などを紹介いただく欄です。

<養成校紹介>

昭和54年4月現在、理学療法士・作業療法士養成校は19校（内9校はOT併設）となりました。そこでこの辺で各学校の特色、校風など紹介していただきます。

いずれの欄も、読者諸氏にお役に立てれる内容になることと確信いたしております。

(編集室)

編集後記

お正月の到来に胸躍らせた少年の日は遠く過ぎ去っても、新しい年はやはり新しい希望を伴ってやってくる。新年に人々は過ぎ去った1年をふりかえり、今年こそはと色々の計画を立てる。まして今年は1980年代の最初の新年である。これからの十年をこれまでの十年と思えば、自分自身の十年の計画を立て、また日本の理学療法・作業療法の来るべき十年間の発展に思いを致すよい機会であろう。本号はそのような考えから新年号らしく盛沢山に二つの特集を組んだ。第1の特集「'80年代の幕開けを迎えて」はまず松村氏、矢谷氏のPT・OT両協会長から'80年代のPT界・OT界の展望をお願いし、ついで、全国各地で活躍しておられるPT・OT・医師の方々に'80年代へ向けての提言をひとことずつ述べていただいた。いずれもこれからの10年間にリハビリテーション、PT・OTの世界の大きな課題となるであろう各種各様な問題の指摘、解決の道の提言として貴重なものである。それにつづいて、著名な医事評論家である川上武氏に'80年代の医療・福祉の動向について、たえず、その中でのリハビリテーションの位置づけを考えながらお話を伺った。ともすれば微視的な世界に限られがちな我々の視野を拡大し、全体の中での

我々の位置を考えるのによいお話であった。

第2の特集は「理学療法・作業療法の法的側面」で、PT・OTの資格・業務とそれにまつわる種々の問題について、まず紺矢氏の全般的な解説のあと、本誌編集同人各位から出していたいただいた疑問点に饗庭、紺矢の両氏から解説をしていただく形をとった。日頃から疑問をもっている問題で、これにより解明されるものもあろうし、一方また新たな疑問が起ってくることもあるであろう。感想をおよせいただければ、今後適宜このような試みを重ねていきたいと考えている。

このほか本号から「リハビリテーション・インフォメーション」「養成校紹介」の二つの新しい企画がはじまった。今後全都道府県、全養成校をカバーするまで続けるものであり、データベースとして役立てていただこう。講座、プロGRESSなども新しいシリーズがはじまり、「反省させられた症例」という新企画もはじまった。お正月休みにゆっくりと読んでいただきたい。

最後になったが、全編集委員・医学書院編集室を代表して「新年おめでとうございます。今年もどうかよろしく」と御挨拶を。

(上田 敏)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長

五 味 重 春
埼玉県生活福祉部

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎リハビリ学院院长
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
リハビリテーションペ
イン(痛み)クリニック
かわらび診療所

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

鈴 木 明 子
北海道庁

寺 山 久美子
都心身障害者センター

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

大 橋 博

大 丸 幸

金 子 翼

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

駒 沢 治 夫

佐 藤 章

佐 藤 馨

嶋 田 智 明

高 橋 正 明

武 富 由 雄

谷 岡 淳

富 岡 詔 子

中 屋 久 長

藤 沢 しげ子

松 本 妙 子

丸 谷 隆 明

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

和 才 嘉 昭

(担当 細田・西塚)